

## 国内研修報告

今回私は、傾聴ボランティアサークルごまちゃんのサークル活動の一環として秋田県藤里町で、地域の方との交流と地域資源の発掘を目的とし、活動させていただきました。我々のサークルは毎年夏と冬の二回、サークル合宿という形を取り、藤里町に泊りがけでボランティアと課外学習をさせていただいています。今回で私は7回目の訪問になりました。7回の訪問を通して、藤里町は様々な変化を遂げていきました。かつて地域のしがない食堂であった「かもや堂」はリノベーションにより、おしゃれなダイニングキッチンを備えたオープンスペースになり、かつて物置のように使われていた農村環境改善センターは温泉付きの貸し宿となり、私が初めて来たころに比べると学生や、外部からの来客が増えたように思われます。

今回の合宿では、社会福祉協議会さんの計らいで、マスコットづくりと味噌づくり体験をさせていただきました。

マスコットづくりでは、藤里町でとれた羊毛を用いて、マスコットを作りました。この際、マスコットづくりの先生には町民のひとりである菊池さんになってもらいました。このように藤里町社会福祉協議会では現在、特有のスキルを持つ地域住民の方を講師として呼び、学生や観光客相手にそうした教室を開くというサービスを実施しており、このサービスはマスコットづくり教室にとどまらず、木の食器づくり、切り絵、スノーシュー体験や後述の味噌づくり体験など様々な種類が展開しています。これは、地域の方々の技術や経験あるいは人柄そのものを観光資源とみなすことによって展開されたサービスであると考えられます。

味噌づくり体験では、自分たちで大豆をつぶし、米麴と混ぜてペースト状にして、固めて味噌を作り、淡路さんの作った味噌をきりたんぼにつけていただいた。味噌づくり体験の講師である淡路恵子さんは、地元の食材を用いた食品開発を生業とする方で、淡路さんの作った商品は秋田駅や、東京にも置いてある。淡路さんがこの体験教室を始めようと思ったきっかけは、地元の小学生たちが、大豆が味噌の原料だということを知らないという現状を目の当たりにしたときであったそうだ。近頃、我々は、大豆は大豆として、味噌は味噌として消費し、食品が加工される過程というものに目を向けなくなってしまっている。なんとなく、製品の原料はわかっても具体的な加工プロセスがイメージできないということはよくあるのではないか。このように淡路さんは食育の観点からこうした教室を思いついたそうだ。しかし、この味噌づくり体験、楽しいだけでなく、最後には作った味噌を秋田の郷土料理であるきりたんぼにつけていただけることで十分に観光として成立している。

このように、町のスキルを持つ方々を講師としてお招きし、教室を開くというサービスは地域住民の方々一人一人を観光資源とするやり方として非常に画期的である。そして、これには藤里社協の菊池さんの福祉観が関連しているのだと思う。菊池さんは福祉の対象となる人たちを、単なる福祉のテイカー（受ける側）としてではなく、時には介護者として、時

には教育者として、労働力として、ギバー（与える側）として見るということを徹底していた。このテイクとギブの境界の破壊は次世代の福祉観、社会観としてとても面白い発想である。そして、この価値観はボランティアという行為にも一般化できる。

「なぜ、ボランティアに行くのか」、この疑問は、ボランティアサークルの副代表を経験した私にとって答えなければならない命題であった。お金ももらえないのにもかかわらず、なぜこの一年間ボランティアに行き続けたのか。それは、得られるものがあったからである。ボランティアは無償である。それ故に、得られるものが賃金以外に存在しなければボランティアという行為は生起しない。さらに言えば、賃金以外の得られるものがあるからボランティアという行為は自発性を伴って生起するのである。ボランティアは利用者に対峙するとき確実にギバーである。しかし、実はそれと同時に私たちは何かをテイクしている。でなければ、ボランティアは生起しない。であるから、私たちはそのテイクに対して自覚的でなければならない。得られるものがあるということを各々が自覚し、そのうえで私たちは自発的に、その得られるものを得るためにボランティアに行く。それがボランティアという行為なのである。つまり、ボランティアという行為そのものが、テイクとギブの境界の破壊の上に成り立っているものなのである。

こうしてボランティアという行為そのものを定義したうえで、この一年間本当の意味でボランティアできていたかと自分に問うと、胸を張って「できた」とは言えないと思う。時には義務感のみで行ったボランティアもあったし、毎回毎回、得るものに対して自覚的で、食欲にそれを求めることはできなかったかもしれない。この先、ボランティアに行く際には、得るもの、得たもの、そういったものを自覚し、真に自発的なボランティアをやっていきたいと思う。